【55】

氏　名（本　籍）	林（はやし）　四（し）郎（ろう）（東京都）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　乙　第　46　号
学位授与年月日	昭和55年11月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	文の姿勢の研究
主　査	筑波大学教授　文学博士　馬　淵　和　夫
副　査	筑波大学教授　文学博士　牛　島　徳　次
副　査	筑波大学教授　文学博士　安　井　　稔
副　査	筑波大学教授　川　口　喬　一

論　文　の　要　旨

本論文は，文章論の立場に立って，文章中のあらゆる文が，直前までの意味の流れを受けて構文活動を始める場合，どういう内容を，どこで，どういう形で受け止めるものか，それには，およそどんな受け止め方の型があるのかを調べて，その記述を試みたものである。論者はこれを「文の起こしの型」，あるいは「起こし文型」と呼んでいる。従来「文型」とは一文（センテンス）の範囲内で記述され，構文上の型と表現意図上の型とだけが記述の対象とされてきた。しかし，実際の文は，文章という「想」の連続の中で発話されるものであるから，文型にも一文の範囲を超えて文脈との関係でとらえることが必要であるとする立場に立っている。

本論文は大きく，

第1編　起こし文型の記述

第2編　文章理解過程の分析

の二編から成っている。第1編において，1社の小学校国語教科書2年用本文1千余文を調査し，その各文の起こし文型を記述し，第2編において，英語の短編小説を例にして，第1編での記述結果を実証しようとした。

第1編における，型の大区分は次の通りである。

始発型　　文章（文連続のひとまとまり）の流れがその文から始まることを示す型

承前型　　先行文脈を受ける文であることを示す型

転換型　先行文脈を受けつつ，新たに流れを起こすことを顕著に示す型

自由型　文脈との関係を何も示さない型

自由型を除く3型には，それぞれの型を形成する因子が見出される。

その因子が1語の類型上の特性に見出される場合，これを「記号」と称し，記号とするには至らぬながら，そこに明らかに因子の形跡を見出し得る場合，これを「要素」と称する。承前型については，記号も要素も見出しがたくても，なお自由型ではなく承前型であることが認定される場合，これを，「承前位置」と称する。

以下，記号，要素，および承前位置によってそれぞれの型を分類し，さらにそれぞれの型に属すると認められる具体例によって詳細な分類をほどこしている。

いま，始発型の起こし文型を例にとれば，

「始発記号による始発型の起こし文型」とは，

てるおくん，つぎを読んで。

みんな，しずかに。

さあ，やろう。

ただいま。

のような　呼びかけの語を持った文，

あ，バスだ。

のような　感動詞を持った文，

むかし，むかし，ある国の王さまが，……

あるところに，さるとかにがおった。

のような　時間・空間を設定する語を持った文，がある。

「始発要素による始発型の起こし文型」には，

おまたせいたしました。

のような　習慣的あいさつ文，

幸いなことよ。

のような　感動表出の文，

あるあさのことです。

のような　時間・場所設定の文，

ぼくは，おじさんのうちへ行って，海でつりをしました。

のような主題設定の文，などがある。このような細かい点に着目して，各文型の特徴を捉え，詳細な分類をほどこしたものである。

第2編においては，英語の短編小説James Joyceの〝Eveline〟を例にして，主に起こし文型の観点から観察し，想の連続がどういう組織で保持されて行くかを，理解の立場と関連させつつ分析した。その結果，起こし文型が日英両語にかなり共通性の高い組織としてとらえられることを見出した。

審　査　の　要　旨

従来文章論的見地から文型の考察を行った研究はほとんどなく，文章研究の未開拓の分野であった。論者はこの分野に対して，「意味の流れ」という観点から，そのしるしがどこかに表われているはずであるとして，具体的な文章を対象にして，それを構成する各文の「起こし文型」を詳細に記述し，分類した。その分類は詳細を極めているが，決して無理な強行はせず，読者にとって納得のいくような柔軟な処理を試みている。しかもこの分類は，単に日本語の文章にのみ見られるものではないことを英語の１短編小説を例にとって実証しようとしているが，ここでも無理な適用をすることなく，ある場合では両国語の相違点をも指摘しており，全般的には論者の主張が妥当性を持つことを示したものといえる。

ただし，このような詳細な分類を試みると，やはりどちらに属すべきかという疑問の用例もないではないし，これらの分類の基底にひょっとして存在するかも知れないある仮説が設定されてあれば，なお一層よくその所説が理解されたであろうと思われる。

しかしながら，国語文章論上の未開拓の分野に対して，鋭い洞察と緻密な論理構成とをもってすぐれた考察をなし遂げた功績は高く評価できるものであり，今後，日本文のみならず，外国文についても文章研究や文型研究には必ず参照されるべき業績であると認められる。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。